自己呈示欲求はスピーチ中の身体表現に表出されるのか

森田　寛介†　　阪田　真己子†　　坂本　晶子††
† 同志社大学文化情報学部　　†† （株）ワコール人間科学研究所

1. はじめに

表情や振る舞い方などの手段によって、他者が自分に対して抱くイメージを操作することを「自己呈示」という（小島・太田・菅原 2003）。これまで行われてきた自己呈示に関する研究は、個人特性と自己呈示の関係を質問紙によって確かめようとするものがほとんどで、それらが実際の行動へどのように表出されるのかという点にはほとんど言及されてこなかった。そこで本研究では、自己呈示の欲求がスピーチ中に表出される身体表現にどのように表出されるかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

実験協力者は大学生及び院生計 70 名（男性 33 名、女性 37 名、平均年齢 22.22 歳、*SD* = 0.50）であった。実験では、3 分間の自己紹介スピーチを行ってもらい、実験の様子をビデオカメラで収録した。収録映像からビデオコーディングにより、「発話量」「笑顔」「表象的ジェスチャー 」「アダプター」「フィラー」「カメラへの注視」の生起量を抽出し、発話量以外の生起量は単位時間 60 秒当たりの生起時間（秒）に換算した。また、自己紹介実験前に賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（小島ら 2003）、自己紹介実験後に一般的自己呈示イメージ尺度（小林・谷口 2004）への回答を求めた。

3. 結果

3.1 自己呈示欲求と身体表現

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（小島ら 2003）に関する回答結果に基づき、実験協力者を k-means 法によるクラスター分析によって 3 つのクラスターに分類した。各クラスターを「拒否回避型」「賞賛獲得型」「低拒否回避型」と名付けた。

6 つの身体表現に対して算出した生起量を従属変数、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度のクラスターを独立変数として、Shaffer の方法による多重比較検定を行った。結果、賞賛獲得型は拒否回避型よりも笑顔の生起量が 0.1%水準で有意に多く（p<.001）、拒否回避型、低拒否回避型よりも表象的ジェスチャーの生起量が 0.1%水準で有意に多いこと（ps<.001）が示された（図 1 参照）。また、拒否回避型は賞賛獲得型、低拒否回避型よりもアダプターの生起量が 5%水準で有意に多く（ps<.05）、低拒否回避型よりもフィラーの生起量が 5%水準で有意に多いことが示された（p<.05）。さらに、賞賛獲得型と低拒否回避型は拒否回避型よりもカメラへの注視時間が 1%水準で有意に長いことが示された（ps<.01）。発話量に関しては、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度のクラスター間で有意な差は認められなかった（p=.38）。

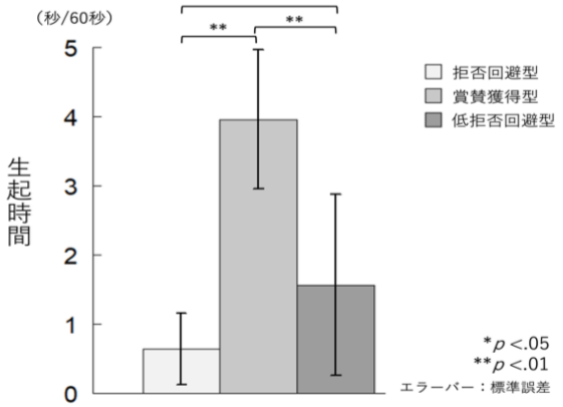

図 1. クラスターにおける表象的ジェスチャーの生起量

3.2 自己呈示イメージと身体表現

6 つの身体表現に対して算出した生起量と自己呈示イメージの関連性について確かめるために、Pearson の相関分析を行った。結果、「外見的に魅力がある」と思われたい人ほど表象的ジェスチャーの生起量が多く（r=.27, p<.05）、笑顔においても生起量が多くなることが示された（r=.27, p<.05）。また、「精神的に強い」と思われたい人ほどカメラへの注視時間が長くなることが示された（r=.28, p<.05）。発話量、アダプター、フィラーに関しては、相関が認められなかった。

4. 考察とまとめ

本研究では、個人の持つ自己呈示欲求や自己呈示イメージが、スピーチ中の身体表現に強く影響を与えていたことが明らかとなった。自己紹介スピーチという機会において、自己呈示、すなわち、他者に対して自分の印象を操作しようとする意図が発話量以外の身体表現に反映されており、自己呈示のパターンによって、自己呈示方略は異なることが確かめられた。本研究によって、自己呈示欲求や自己呈示イメージのような目に見えない内的なものが身体表現として外在化しているということが示された。

参考文献

[1] 小島弥生・太田恵子・菅原健介（2003）,「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み」,性格心理学研究 11,pp.86-98
[2] 小林知博・谷口淳一(2004),「一般的自己呈示尺度作成の試み（1）」,日本心理学会第 68 回大会論文集,p.116

Copyright © 2022 IEICE